

5月の特集 ガーデニングの基礎知識（後編）



水



盆栽界では古くから「水くれ三年」という言葉が伝えられてきました。気の効いた者なら、水くれぐらいは1年でマスターできるさ、と思われがちですが、本当は3年続けてはじめて植物たちの水の求め方が理解できるという、深い意味合いをその言葉に見ることができます。そして水くれの理想は、その植物のほしい時にほしただけの水を与える。これだけです。

でもそのほしい時を知るのが大変です。春・秋は朝1回。夏は朝・夕2回。冬は時々...などという人は本物の園芸家ではありません。本物は、鉢の表面が乾くのを見て、今は鉢が7分乾きになったからたっぷりやろう。お前は8分乾きになってからが好きだから、もう少したってから...と普通の人ではとても考えられない対応をします。しかしここまでする人はそうはいないので、原則として鉢の表面が乾いたらたっぷりやると理解しておいて下さい。というのも、可愛がりすぎて、いつも水をやりすぎていると、実は鉢の土の温度が上がらないため、植物の根の成長はかえって悪くなってしまうからです。普通根は、土の温度が25~27の時が一番活動して伸びるものです。水やりは多ければいいのでは決してありません

土



植物を順調に育てる基本中の基本が、よい土であるかどうかでしょう。鉢花栽培なら現在は豊富な種類の専門培養土が市販されているので、それらを上手に利用しましょう。また山野草・盆栽なら赤玉土を主体として富士砂や桐生砂などという団粒構造のお手本のような砂を3割前後混ぜて、排水、保水、空気持ちのよい土を作ります。

ちょっと気になる話！

時々ガーデニングのハンギング・バスケットやプランター作りをする人で、庭や畑の土を使っている人を見かけますが、植物にとっては最悪です。水やりとともに一緒に土の中にさあーと入るはずの空気がほとんど入らないため、植え込んだその日から植物は窒息状態となります。1シーズンの楽しみだけなら、なんとか花は楽しめますが、多年草でしたらまず翌年はまともに育ちません。

花壇の植物が健康にきれいに育つには、“良い土作り”が欠かせません。良い土の条件は、適度な水はけ、水持ち、通気性、有機質を含むことなのです。

ミミズが住むような土が良いと言われていますが、握った時に柔らかく弾力のある土が良いといえます。また、清潔で、土壌酸度が中性のPH7.0から弱酸性のPH5.5～6.5であることも重要です。花壇を作る時は、まず深さ30cmぐらい掘り起こして、雑草やゴミ、ゴロ石などを取り除きます。次に、腐葉土やピートモス、完熟堆肥、パーク堆肥などの有機物を全体的にまいていきます。苦土石灰をまき、土にすきこんで良く混ぜて、1～2週間なじませます。雨が降らなければ、水やりをしてくださいね。

光

鉢花など園芸栽培の植物は、たいていが日光好きです。光の当て方の基本は、午前中の光はすべての植物が喜ぶ、夏の西日はほとんどの植物が嫌がる、根は温度の高い方へ伸びるので、鉢は1ヶ月に1回向きを正反対にまわすと根は平均して伸びる、光線不足と通風不足が重なると病害虫の発生が格段に高くなる…です。

これからの季節、好きなお花をお好きな所へ植えて楽しみましょう！